てっぺんの葉っぱ

「考える」ということ

5年　R・Oさん

「自分で考えなさい」、父も母も大人はよくこの言葉を口にする。怒られているとき、失敗したとき、どうしていいか分からないとき。そう言われるたびに、私は胸がぎゅっと苦しくなり、言葉にできない威圧感を感じてきた。大人はただ「考えなさい」と指示するけれど、一体「何を」「どうやって」考えればいいのかを教えてはくれない。私にとってその言葉は「アドバイス」などではなく、ただ「あなたが間違っている」と責めたてられているだけの壁のように感じられていたのだ。

物語の主人公のマチも、私と同じように大人のいう「考える」が分からず、自分の気もちを言えない女の子だった。友達のユリアに気を使ってばかりで、自分の意見を我慢してしまう。そんなマチが「てっぺんの葉っぱ」という魔法のような存在と出会い、少しずつ「考える」ということの本当の意味に気づいていく。

私はマチの心の変化を追いかけるうちに、自分の中にある「考えなさい」という言葉へのモヤモヤの正体に気づき始めた。大人がいう「考える」と、私たちが心の中で行っている「考える」には、大きなギャップがあった。

例えば、失敗して怒られた時。心の中では「怒られて悲しい」「泣きたい」「よくないことをしたのは私だけれど、大人だって間違えないわけじゃないのに」といった感情がぐるぐると渦巻いている。大人はそれを「何もしていない」と決めつけるかもしれない。けれど、その悲しさの裏で、「どうして失敗しちゃったんだろう」「次はこうしてみよう」と私は本当はいつも思っている。そうすると必死に自分と向き合うことこそが、本当の「考える」ことなのではないのだろうか。

この本をよみながら、私は小学校の担任の先生が5年生の新学期に配ってくれた「間違えてもええねん、何度やってもええねん」という詩を思いだした。完ぺきに生きることなんてできない。失敗を重ね、考えることは苦しくて苦手だけれど、人生で一番大切なプロセスなのだ、と思わせる詩を毎日音読するのは、なんだか私を強くしてくれた気がする。

私にも苦しい失敗の経験がある。一つはかくれんぼをしていた時だ。急ぐあまり友だちを転ばしてしまい血をだしてしまった。友人の血を見た瞬間、勝つことよりも大切なことにはじめて気づき、心から謝ることができた。もう二度と同じ間違いはしたくない。

もう一つは妹の誕生日の時である。対戦ゲームに勝ちたい一心で「下手だな、そこじゃない！」と強い言葉で妹を泣かせてしまった。両親から、「妹の誕生日になにを考えているんだ」とひどく叱られたとき、最初の私の気持ちは、「みんながバーティーの用意をしている間、みていてあげているのに」と反発心でいっぱいだった。しかし泣きじゃくる妹の顔を思いだすうちに、威圧的な言葉のせいではなく、自分の内側から反省が込み上げてきた。「相手を喜ばせたい」という一番大切な気持ちを忘れていたことに自ら気付けたのだった。

失敗したからこそ、ダメなことに気づける。大人に言われたから考えるのではなく、自分の失敗を通してしか、人は本当の意味で「考える」ようにはなれないのだと思う。考えることをやめてしまえば、きっといつかまた誰かを傷つけ、悪いことが起きてしまう。けれど自分の過ちに向き合って考えることが出来れば、やり直すことが出来る。

物語の最後に、マチは「考えること」が少し得意になり、ユリアにも自分の気もちを伝えられるようになった。大人と子どもの境界線とは、年齢を重ねることではないはずだ。自分の失敗から逃げずに自分の頭で考え、相手の立場に立って行動できるかどうか。それこそが、本当の意味での「大人になる」ということなのだと思う。

子どもも大人も、失敗を恐れずに自分の頭で考え、お互いを思いやることができれば、きっとみんながハッピーな道を歩める素敵な世界になる。私はこれからも「考えなさい」という威圧的な言葉に縮こまるのではなく、自分の心でしっかりと考え続けられる人になりたい。